

さて、私という事例を挙げて話を進めることにしていますので、まず、私は、母を語ってみることにします。

私は母が苦手でした。苦手と言っても、私を産んでくれた母親を単に嫌ってきたということは、少し違います。

母は、世間の常識からすれば、まず合格点の母親だと思います。決して、不良な母親ではありません。私には、母を嫌う理由がありませんでした。母から、特に不都合なことを受けた覚えはありません。例えば、家族を顧みないで自分勝手な行動をする、いわゆる自己中心的な母親のとぼちりを受けてきたとか、今よくある虐待を受けたとかは一切なかったし、特に教育ママでも放任主義でもなかったので、母親に対して、特に何か不平不満があったわけでもありませんでした。

しかし、私は、母が苦手でした。母の目が苦手だった、母の目を嫌ってきたと言ったほうが、正解かもしれません。

母が苦手だったというのは、母親が特別に何かを言ったから、特別に何かをしたからというのではなく、あくまでも私の側の問題なんだということは、薄々感じてきました。

私は、自分と母との間に、部厚い壁があるのを、ずっと感じていたのです。私は、「母が、目で私を支配している」と、いつも思ってきました。そして、その目と出会ったたびに、「私は、あんたとは違う」と、私の心の中で言い返していたのです。その心はとても冷たく、聳え立つ心でした。私は、母の領域に組み込まれることを極端に嫌い、避けてきました。特にどうかという母親ではないのに、なぜ、このような思いになるのかが、私には全く分かりませんでした。これが学びに集う前の私の思いでした。

そして、時を経て、母が苦手だった私が、「母親に使ってきた思いを見なさい、母親を思っごらん」という学びの門を叩くようになりました。いいえ、叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったのです。そして、学びの門を叩き、自分なりに学ばせていただく中において、自分の中の態勢が整えられていたことを、私自身の心で知るようになりました。

それは、母が苦手だった私が、その母と向き合って、自分を見させてもらおう、私を産んでくれた母を丸ごと、そして、それは同時に私自身の愚かな部分を、みんな自分の心で全面的に受け入れていこう、ようやく、そのように思える私になっていこうとしていたということでした。門を叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったということは、そういうことだったんだと納得でした。

だから、学びの過程において、母に向けて、そして、周りの人達に向けて、自分の出す思いがどれだけ凄まじかったかということを確認できても、私は、それで落ち込むということは、ただの一度もありませんでした。落ち込むどころか、さもありなんと、心が上がってくるものは、納得と喜びだけでした。凄まじい思いと出会うことが、喜びであり、そのために、今という時間を用意してきたことを、はっきりと知るようになったからです。

私を産んでくれた母親に対しては、思いがストレートに出ます。母親の反省の初期段階で、ノートに書きなぐった思いは、どれもこれもみんな自分を中心に据えての思いばかりでした。母親は、何々してくれて当たり前の人でした。だから、してくれたことよりも、してくれなかったことに対しての思いだけが、膨大に膨らんでいきました。それは、まさに、私が、他力の神々に対して使ってきた思いと、何ら変わるところはないと実感してきました。

ノートに書きなぐった思いは、やがて、自分の肉体を通して、エネルギーとして表現されていきました。

口から出る言葉は、「死ね、死ね」の連続で、どこまで、この「死ね」が続いていくのかと思うほどでした。

私は、母を通して、自分の中に溜め込んできたエネルギーを、セミナー会場で存分に outsending していただきました。感じさせていたのだのです。これほど幸せなことはなかったです。それで確認できたことは、私を産んでくれた今世の母親は、私自身が心に溜め込んできたことは、何の関係もなかったということでした。母親という人は、私自身が心にずっと溜め込んできたブラックのエネルギーを出す引き金に、ただなっ

てくれているんだと思いました。

「母が何かを言ったから、何かをしたからではなかった。」

「母に思いをぶつけても仕方がなかった。」

「母の目が厳しいのではなくて、その目を見る私の思いが素直ではなかった。」

母を疎ましく思う自分が違っていたのでした。その自分が真つ黒だったのです。そして、その真つ黒な自分を知っていくために、親と子の縁を結ばせていただいた事実と、私を産んでくれた、私に肉という形をくれたという事実だけが、最終的に、大きく私の中に広がっていきました。さらに、自分のエネルギーを感じていけばいくほどに、それらの事実が、どうしようもなく、ありがたいものになっていきました。

母と子、私達の今世の繋がりは確かにそうです。母と私は血が繋がっています。血の繋がりよりも、もつと強い繋がりがあるのかどうなのか、定かではありません。

私が、ここで言いたいのは、繋がりが強いからどうということではなくて、本当に意識の世界の波動を感じてくれば、こうして、今、私達は肉体を持って繋がっている

のだから、その繋がりの中で、人としてのやるべきことは、きちんとするという方向に、肉は自然になっていくということです。必ずそうなっています。

私は、ただ単なる親と子の扶養関係から、老いていく母親を看ていくものではありません。そんなことは、一人の人間としての最低のルールだと思っています。と同時に、やはり、真実の世界を心で知った喜びによって、自然に人は、そのようになっていくのだと思います。

ところで、昨今のニュースを見聞きしていて、私が一番やるせない思いを感じるの、その最低のルールも守られないことです。なぜ、年端もいかなない我が子を邪険にするのか、反対に、年齢を重ねて思慮分別もあるのに、なぜ、自分の年老いた親を邪険にするのか、その他、私には、理解に苦しむ部分が多々あります。もちろん、一方では、そのようなことは、今世だけの繋がりの親とか子とか、夫とか妻だけでなく、ずっと過去から引きずっているものがあって、様々な惨たらしい事件が起きているということとは、百も承知しています。そういう繋がりの中から、その人達は、自分の心を見て

いかなければならないということも、承知しています。

そして、そのような心の闇がボンボンと噴き出してくる時を迎えていることを、きちんと自分の中で把握できない限り、またもや、心の闇に振り回されて、人間関係のドロドロとした中に、ただ自分を沈めていくだけの結果となっていくことは、様々な事件を通して、はつきりと示されています。それは分かっているけれども、何で、我が子を虐待できるのか、殺すことができるのかと思ってしまう。その他のこともそうです。何で、そんなことができるのかと、それらのニュースに接するたびに、何か悲しい気がします。

今は、自分のエゴと欲と無知で、我が子を虐待したり、殺す父親や母親が続出する時代となり、また、自分を産んで育ててくれた母親を、邪険にしたり、死に追いやっていく時代となってしまう。親子だけではなくて、夫婦でも友達でも、気に入らなければ、簡単に殺します。社会は何も自分のことを分かってくれないと、自分の中の鬱憤を、面識のない人達に向けて簡単に吐き出していきます。危害を加えても、

平然としています。

お金に狂い、欲にまみれた中で、そして、自己中心的な暴走エネルギーの犠牲となっていく命を思うとき、ここまで、人の心は失墜しているのかと感じざるを得ません。

もちろん、殺されたり邪険にされたりするには、されるだけの理由があります。加害者だけが責められるのではなく、そこには確かに因果関係があります。

しかし、今は、あまりにもその手口が残忍です。そういう意味で、心に巣食っている闇の深さを、感じています。まさに、もうどうにも止まらない勢いで、狂いに狂ったエネルギーの噴き出しが日常茶飯事に起こってくる時代にすでに突入しているといふことでしょう。

たとえば、インターネット社会の弊害や、危険ドラッグの問題もそうです。そして、日本の国では、まだ無差別テロが身近に感じられないかもしれませんが、近い将来、その脅威は大いにあると思います。